

氏 名	たまだ ひろゆき
学位(専攻分野)	玉 田 浩 之
学 位 記 番 号	博 士 (学 術)
学 位 授 与 の 日 付	博 甲 第 4 0 9 号
学 位 授 与 の 要 件	平成 18 年 3 月 24 日
研 究 科 ・ 専 攻	学位規程第 3 条第 3 項該当
学 位 論 文 題 目	工芸科学研究科 機能科学専攻
審 査 委 員	近代アメリカ建築における地域主義に関する研究 (主査)
	教授 石田潤一郎
	教授 岸 和郎
	教授 中川 理

論文内容の要旨

申請論文は、主としてモダニズムがアメリカに流入し、広く展開した時期として知られる 20 世紀の第二四半期を史的論考の対象とする。この時期のアメリカは、モダニズムが展開すると同時に、地域主義が意識化された時代として捉えることができる。この二面性に着目して、モダニズムの受容期以降の建築やそれに関する議論に表出した歴史的課題を抽出している。

申請論文では、アメリカ建築の近代化の二面性を捉えるための具体的な考察対象として、アメリカの近代建築を推進した団体であるニューヨーク近代美術館をめぐる地域主義に関する議論と、アメリカにおけるモダニズム建築家としての代表的な位置を占めながらも地域的展開を示したリチャード・ノイトラに焦点をあてている。ここでは、主としてアメリカの建築雑誌におけるインターナショナル・スタイルと地域主義に関する議論を追うこととなるが、その際、アメリカにおいて地域主義が意識化された社会的背景、すなわちテクノロジーの発展や経済性の追求、国際的な文化交流の歴史を意識することで、アメリカ建築の近代化の構図を明らかにした。

論文は、序論、本論 5 章、結論により構成される。このうち第 I 部は、ニューヨーク近代美術館の近代建築推進の過程にみる二重性を明らかにすることで近代化の構図を提示したものであり、第 II 部は、建築家 R.J.ノイトラを事例に、アメリカ西海岸のモダニズムの受容と地域主義の展開を考察したものである。

序論では、研究の目的と視座、論文の構成、そして既往研究について触れながら問題意識について述べつつ、近代建築の地域主義に関する研究の動向を概観し、地域主義の注目によって明らかになると思われる内容について概説している。

第 I 部第 1 章では、ニューヨーク近代美術館の近代建築の推進過程の内実を明らかにした。そこでは、アメリカにふさわしい様式としてインターナショナル・スタイルが提示されていたが、その一方で地域的な展開の支持が表出している。ここでは MoMA の内部にみられる近代建築推進過程の二重性を抽出した。

第 2 章では、近代アメリカ建築における地域主義の概念の表出の過程を、ルイス・マンフォードとニューヨーク近代美術館の対立的な議論のなかに求め、その展開を追うことにより、地域主義が否定される過程を論じている。アメリカ建築の創作活動における二重の傾向、すなわちモダニズムと地域主義を明らかにして、アメリカにおける両者の相対的な位置づけを考察した。

第 II 部第 1 章では、カリフォルニアを代表する建築家リチャード・ノイトラのモダニズムから地域

主義への展開を分析するにあたり、テクノロジーと場所という問題をどのように論じて実践しようとしていたのかを検証した。ノイトラを通してアメリカのモダニズム、すなわちインターナショナル・スタイルの地域的な展開を考察している。

第2章では、ノイトラの標準化の導入にみられる建築理念と、設計手法のアメリカ化とも言うべき現象を検証した。これにより、モダニズムの部分的に進行した地域化、あるいは地域的な順応の事例を明らかにした。

第3章では、ノイトラの建築観にみられるモダニズムと地域主義の両面性を明らかにしている。日本視察が彼の建築観形成の刺激になっていたことを指摘すると同時に、ヨーロッパに端を発するモダニズムが、日本とアメリカとの交流のなかで変容していく様相を捉える。そこにおいて明らかとされたのは、日本との関連から見ると、彼の建築観には、地域主義がモダニズムと齟齬を起こすことなく共存していることである。

結論では、アメリカの近代建築を主題として論議するなかで、地域性が評価基準のひとつとなるが、近代建築運動の主流を形成するには至らなかったことを踏まえて、モダニズムと地域主義との相関関係をみることで近代化の史的構造を明らかにした。最後に、各章の検証結果を総括しつつ、近代アメリカ建築にみられる地域主義の議論がどのような史的特質をもつのかについて考察し、今後の課題を示して本研究の結論としている。

論文審査の結果の要旨

近代アメリカの建築思潮において、米国固有の気候風土あるいは文化的伝統をふまえて建築を設計すべきであると考える地域主義は重要な位置を占める。ヨーロッパ的歴史主義に対する独自性の主張として、あるいはモダニズムに対する批判の根拠として、それが担ってきた意味は大きい。しかしながら、地域主義に関する歴史的経緯についての研究は、アメリカ本国においても、概括的な把握にとどまるか、個別的事象の解明で終わっているのが現状である。本研究では、二十世紀第二四半期を対象として地域主義がどのように形成されてきたかをモダニズムとの関係を軸に解明したものである。

第1章では、まず1930～40年代のニューヨーク近代美術館(MoMA)の展示内容を精査することで、モダニズムの牙城と見なされるがちな同美術館においても地域の固有性を重視していたことを示した。続いて、1947年に起きたMoMAと批評家L.マンフォードとの論争と、それを巡る言説を分析し、この論争が一般に考えられるような地域主義とモダニズムの対立の反映であるというよりも、「様式」を普遍的な尺度とする思考的枠組みを通して建築を理解しようとするMoMAと、それを脱却して、地域性が普遍的な価値を持つ可能性を構築しようとするマンフォードとの対立に起因すると考えられるべきであることを明らかにした。これらを通して、地域主義がモダニズムの展開を契機としてその理念を意識化させていった局面を明確にした。

第2章では、1930年代から50年代にかけてめざましい活躍を示した建築家R.ノイトラを分析対象として、彼のモダニズム的建築観が当初から「アメリカのテクノロジー」という地域性を帶びており、設計手法においても地域的特性に順応した「アメリカ化」を経ていることを解明した。さらにノイトラが日本を訪れて、日本建築における部材の標準化、そして日本建築と外部空間と

のつながりを知り、その建築觀を変化させていったことを明らかにした。これらを通じて、モダニズムが地域主義的価値觀を内包していく過程を明確にした。

一般的に地域主義はモダニズムと対立し、相互排除的な関係にあると考えられているが、1930年代～40年代のアメリカにおいては、地域主義はモダニズムにとってむしろ相補的な関係にあり、両立をも図られる存在であったことが示された。徹底した文献の博搜に基づく論考は説得力に富んでおり、アメリカ近代建築史研究に寄与するところはまことに大きい。また日本とアメリカの建築文化の交流という視点からも注目すべき研究であり、きわめて高く評価できる。

本論文の内容は、学術雑誌の3編の審査論文として公表されている。

- ①玉田浩之、石田潤一郎「1920年代および30年代のリチャード・ノイトラの建築思想におけるテクノロジーについて」、『日本建築学会計画系論文集』第574号、209～215頁。2003年12月
- ②玉田浩之、石田潤一郎「リチャード・ノイトラの初期住宅作品における設計手法について——1920年代及び30年代の実験的工業化住宅を中心として——」、『日本建築学会計画系論文集』第587号、235～241頁。2005年1月
- ③玉田浩之「リチャード・ノイトラの建築觀と日本」『日本建築学会計画系論文集』第600号、223～228頁。2006年2月